

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月24日現在

機関番号：18001

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20720057

研究課題名（和文） 琉歌集のデータベース化と研究

研究課題名（英文） A study and database compilation of “Ryukasyu”

研究代表者

前城 淳子（MAESHIRO JUNKO）

国立大学法人 琉球大学・法文学部・准教授

研究者番号：90336355

研究成果の概要（和文）：各地に保存されている琉歌集について、歌集名、編纂者、書写者名、収録歌数などの情報を整理し、①節組琉歌集、②部立本琉歌集、③歌会別琉歌集、④作者別琉歌集、⑤教訓歌集、⑥疱瘡歌集、⑦その他の歌集に分けて整理した。また、これまで翻刻・紹介されていない琉歌集の中から琉球大学附属図書館伊波普猷文庫蔵『琉歌集春の部』を取り上げ、翻刻を行った上で、この歌集が『古今琉歌集』の成立に関わる琉歌集であることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：About a Ryukasyu handed down to each place, I arranged information. It was arranged every name of the Ryukasyu, an editor, the number of the ryuka, the kind of the collection of Ryuka-syu. In addition, I took up “Ryuka-syu harunobu” from that and clarified it about relations with “Kokin Ryukasyu”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：琉球文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：琉球文学、琉歌、琉歌集、節組琉歌集、詠み歌琉歌

1. 研究開始当初の背景

琉歌は三線音楽の歌詞として、また組踊の詞章として歌い継がれてきた。その一方で、歌会などの場で題を掲げて詠むことも行われた。琉歌は歌われるものであるとともに、詠まれるものであるという側面を持ってお

り、このことは琉歌集の編纂方法にも色濃く反映されている。

1980（昭和55）年に角川書店より発行された『南島歌謡大成Ⅱ沖繩篇下』によって、「屋嘉比朝寄工工四」「琉歌百控」「天理本琉歌集」「疱瘡歌若口説古名歌集文」「琉球大歌

集」「古今琉歌集」が翻刻・集成された。これによって、個々の琉歌集の特徴を踏まえ、琉歌史的な観点から琉歌研究を行う基盤造りがなされたと言えるだろう。しかし、典型的な節組琉歌集である「沖繩声曲集」や「琉球俗謡集」が採られていない。又、節組や部立本のどちらの範疇にも入らない「古琉歌集」「作者別琉歌集」など、琉歌研究に必要な歌集が抜け落ちている。これらのうちのいくつかは、『南島歌謡大成』以後、池宮正治氏や嘉手苺千鶴子氏らによって翻刻・紹介されてきたが、手付かずのまま残された歌集も少なくない。

1994(平成6)年に沖繩タイムス社から『琉歌大成』が発行された。『南島歌謡大成』に収録された歌集だけでなく、「新撰琉歌集」「朝春本琉歌集」「琉歌註釈」「宮良當智本琉歌集」「博物館本琉歌集」「宮平本琉歌集」「琉球歌曲」「狂戯いろは琉歌」など、これまで紹介されてこなかった琉歌集を取り上げ、諸本に収録された琉歌(総数5,100首)を校訂したうえで五十音順に配列したものである。収録歌数が多いこと、歌の検索が容易に行えるようになったことなど、評価する点も多いが、個々の歌集の姿を再現することは難しい。これまでの琉歌研究の成果を引き継ぎ、発展させるために、現存する琉歌集を整理し、データベース化する必要があった。

2. 研究の目的

本研究は、現存する琉歌集の網羅的な調査と収集を行い、琉歌集の書誌的情報を整理するとともに、個々の琉歌集の系統を明らかにすることを目的とする。琉歌集は成立年代や編纂者が不明な場合が多い。表題に「琉歌集」とのみ記されたものも複数あり、琉歌集間の関係は明らかにされていない。

これら琉歌集の系統を明らかにするためには、収録された琉歌の重複関係や、表記の異同などを丁寧に見ていく以外にない。そのために、Ⅰ歌集情報データベース(琉歌集の書誌情報データベース)、Ⅱ琉歌データベース(それぞれの琉歌集ごとに、琉歌本文、作者名、節名、部立など、歌集のテキストを整理するデータベース)、Ⅲ琉歌索引データベース(琉歌とそれに付随する情報を検索するためのデータベース。琉歌本文、作者名、節名、部立などの項目毎に作成する)の三つのデータベース作成を行う。

3. 研究の方法

琉歌集の系統を明らかにし琉歌研究の基盤を強化するために、Ⅰ歌集情報データベース、Ⅱ琉歌データベース、Ⅲ琉歌索引データベースの三つのデータベース作成を順次行

う。また、これらのデータベースをもとに、各琉歌集の関係や、琉歌集の種類について明らかにする。

以下、三つのデータベースの概略を述べる。

(1) 歌集情報データベース

琉歌集の書誌情報を整理するためのデータベース。沖繩県立図書館、琉球大学附属図書館、宮古島市立総合博物館、石垣市立八重山博物館、石垣市立図書館、鹿児島県立図書館、鹿児島県立図書館奄美分館、法政大学沖繩文化研究所、早稲田大学附属図書館等に収蔵されている琉歌集の確認を行う。その際、①歌集名、②冊数、③大きさ、④装丁、⑤丁数、⑥材質、⑦状態(損傷の有無等)、⑧成立年、⑨編纂者・書写者名、⑩収録歌数、⑪歌集の種類(節組・部立・その他)、⑫その他、の項目に分けて書誌情報の整理を行う。現物確認が出来ない歌集については、各機関が公開している目録等により情報の整理を行う。

(2) 琉歌データベース

琉歌本文を整理するデータベースである。『南島歌謡大成』以後に翻刻・紹介された歌集や、これまで翻刻されていない琉歌集の中で重要と思われる歌集について、①歌番号、②琉歌本文、③作者名、④節名、⑤部立、⑥註記、⑦備考の項目に分けて整理する。節組琉歌集の中から『沖繩声曲集』『琉球俗謡集』『山城正楽本琉歌集』『宮良當智本琉歌集』『仲宗根玄純本琉歌集』『琉歌節組』、部立本琉歌集から『琉歌集春の部』『南苑八景』等がこの対象となる。

(3) 琉歌索引データベース

琉歌とそれに付随する情報を検索するためのデータベースである。(2)で作成したデータをもとに、①琉歌句索引、②作者名索引、③節名索引の索引を作成する。

4. 研究成果

(1) 琉歌集の種類

琉歌集はその編纂方法によって、①節組琉歌集、②部立本琉歌集、③歌会別琉歌集、④作者別琉歌集、⑤教訓歌集、⑥瘡瘡歌集、⑦その他に分けられる。

①節組琉歌集は、かぎやで風節、恩納節、長伊平屋節、中城はんた前節、こて節などの節名ごとに歌が配列されたものである。琉球大学附属図書館宮良殿内文庫蔵『宮良當智本琉歌集』、八重山博物館蔵新本家文書『琉歌節組』、東洋文庫蔵『沖繩声曲集』、沖繩県立博物館蔵『琉歌集』、宮古島市総合博物館蔵『琉歌集』、ハワイ大学宝玲文庫蔵『琉球俗

謡集』、東京芸大附属図書館蔵『琉歌集』、琉球大学附属図書館伊波普猷文庫蔵『琉歌集』などがある。三線の伴奏にのせて歌うための実用のために編纂されたものであろう。歌集の数は多いが、節名の配列や採られた歌の配列や数が歌集毎に異なっており、歌集間の関係は明らかになっていない。

②部立本琉歌集は、春、夏、秋、冬、恋、雑といった、歌の主題によって分類したものである。伊波普庫蔵『琉球大歌集』、伊波文庫蔵『南苑八景』、『古今琉歌集』、伊波文庫蔵『琉歌集 春の部』、天理大学附属図書館蔵『琉歌集』(天理別本琉歌集)、『新撰琉歌集』(大城松吉編、大正七年、松屋活版所)などがある。小橋川朝昇が編纂した『琉球大歌集』は原本が存在せず、田島利三郎が筆写した抄録本が伊波文庫に残されているだけである。同じく伊波文庫の『南苑八景』と部立の構成が似ているが、一方で採られた歌が一方では採られていないなど、両者の関係は明らかになっていない。『琉球大歌集』は部立本琉歌集の嚆矢であり、その後の琉歌集編纂に大きな影響を与えた重要な歌集である。『古今琉歌集』は明治 28 (1895) 年に小那覇朝親によって編まれた。その後何度も再版され、広く流布した琉歌集である。『古今琉歌集』とその系統の琉歌集については次項で述べる。

③歌会別琉歌集は、琉歌の歌会の作品を纏めたものである。那覇市史編集室蔵『近代沖繩歌集』、那覇市立首里図書館蔵「明治大正琉歌集」、ハワイ大学宝玲文庫蔵『琉歌会例題集』、伊波文庫蔵『戊申琉歌会』がある。『近代沖繩歌集』「明治大正琉歌集」は明治・大正期に結成された琉歌会の詠草を、歌会ごとに四季、恋、雑に分けて編纂したものである。『琉歌会例題集』は明治 30 年代に活動した歌会の詠草が会の開催順に収録されている。『戊申琉歌会』は明治 40 年代に活動した戊申琉歌会の詠草の記録である。

④作者別琉歌集は琉歌の作者別に琉歌を分類したものである。伊波文庫蔵『琉歌集』(公開番号 71) がここに分類される。110 名の作者ごとに 648 首の琉歌が収録されている。本文 50 丁裏から香川景恒の和歌 41 首が収録されている。

⑤教訓歌集は教訓的な内容の琉歌を集めたものである。琉歌をいろは順や一二三順に並べた「いろは歌」と、教訓歌一首ごとに候文で解説を加えた「家訓歌語」がある。「いろは歌」にはハワイ大学宝玲文庫蔵『狂戯いろは詩歌』、八重山博物館喜舎場英勝家文書『いろは詩歌』、八重山博物館新本家文書『いろは哥』、八重山博物館宇江城家文書『いろは聯句歌』がある。宝玲文庫本と喜舎場家本はほぼ同じで、いろは詩歌序、いろは歌、一二三冠首歌とそれぞれに対応する聯句が収

録されている。宇江城家本は喜舎場家本から聯句の部分が省かれ、十二支冠首歌、十二支の口説、いろは口説、物語、候文が新たに追加されている。新本家本には序文がなく、いろは歌、一二三冠首歌、無蔵念仏、座開が収録されている。「家訓歌語」には八重山博物館識名家文書『家訓歌語』、宮良殿内文庫『家訓歌語』、八重山博物館新本家文書『家訓哥語並万口説集』がある。収録されている歌に異同は少なく、子弟の教育のために写本によって流布したもののようである。

⑥疱瘡歌集には伊波文庫蔵『疱瘡歌和歌口説古名歌集文』がある。疱瘡(天然痘)の治癒を願う琉歌を集めたものである。

⑦その他の琉歌集には、伊波文庫蔵『琉古歌集』(公開番号 76)、八重山博物館糸洲家文書『古哥并つらに中風集』、琉球大学附属図書館蔵『琉歌輯』、伊波文庫蔵『琉球歌選』(公開番号 62)、『琉歌疑問録』(公開番号 63)がある。何れも編纂者による琉歌の撰集のようで、節名や部立といった歌の分類を示す見出し等は見られない。

(2)部立本琉歌集の系譜

『古今琉歌集 上巻』は、春、夏、秋、冬、恋、仲風、恋の七つの部立からなり、1,700 首の琉歌を収録している。凡例によって、故小橋川朝昇大人の編輯した歌集に基づきその他の歌集を参考にして編まれたものであること、節組は故野村安趙の撰によるものであることが分かる。しかし、小橋川朝昇の『琉球大歌集』と部立や各部立内部の歌の配列などが異なっており、そのまま踏襲したものではない。

明治 44 (1911) 年には富川盛陸編『古今琉歌集 再版』が、昭和 31 (1956) 年には比嘉寿助編『古今琉歌集』が刊行されている。編集者名が異なるが、これらはいずれも『古今琉歌集 上巻』の再版本である。

大正 7 (1918) 年に刊行された大城松吉編『新撰琉歌集』は春、夏、秋、冬、恋、仲風、遊女を読める琉歌、雑、の八つの部立構成からなる。収録歌数は 1,113 首。遊女を読める琉歌 (209 首) 以外はすべて『古今琉歌集』所収歌と重複している。『古今琉歌集』から抄録した部分にあらたに遊女の歌を加えたものであろう。

伊波文庫の『琉歌集』(公開番号 68)、『琉歌集(真境名笑古写)』(公開番号 58) の二つの歌集は、それぞれ 129 首、238 首の琉歌を収録している。部立は示されていないが収録されている歌がすべて『古今琉歌集』と重複していること、歌の配列が『古今琉歌集』とほぼ同じであることから、『古今琉歌集』からの抄録本であると思われる。

この他『古今琉歌集』と近い歌集に、天理大学図書館蔵『天理別本 琉歌集』、伊波普

猷文庫蔵『琉歌集 春の部』『琉歌集 冬の部』があげられる。『天理別本 琉歌集』は、収録されている729首のすべてが『古今琉歌集』と重複しており、歌の配列順も同じである。『古今琉歌集』にあつて『天理別本 琉歌集』に採られていない971首の多くが、各部立の後半部分に収録されている歌である。この歌集が『古今琉歌集』の元本であるのか、『古今琉歌集』からの抄録本であるのかは、今後さらなる検討が必要であろう。

『琉歌集 春の部』（公開番号72）は、伊波文庫の目録では『琉歌集 冬の部』とともに一つの歌集として扱われているが、この二つはそれぞれ別の歌集である。表紙や奥書等がないため、冒頭の「春の部」をとって歌集の名称を「琉歌集 春の部」としているが、収録された琉歌は春の歌のみではない。本歌集は春の部、夏の部、秋の部、冬の部、恋の部、雑の部の六つの部立からなり、全部で1,088首の琉歌を収録している。収録されている歌がすべて『古今琉歌集』と重なることや、作者名の誤写が『古今琉歌集』の初版でもそのままになっているなど、『古今琉歌集』の編纂過程で作られたものと推測される。

『琉歌集 冬の部』は冬の部下、冬の部上巻、秋の部下、春、賀、恋の部上、春の部下巻、夏の部上巻、秋の部上、夏の部下巻、道歌、夏、恋の部下、春の部上巻の十四に分けられ、916首の琉歌を収録している。作者名の記載は見られない。錯簡が多く、今後丁寧に見ていかなくては分からないが、各部立内部の歌の配列はほぼ古今琉歌集と同じである。しかし、古今琉歌集にない歌が33首採られていること、「春の部上」「春の部下巻」のように各部が上下に分けられているなど、『古今琉歌集』と異なる分類がされている。『天理別本 琉歌集』と同じく、『古今琉歌集』の元本である可能性はあるが、今の段階では不明である。

(3) 『琉歌集 春の部』と『古今琉歌集』

①収録歌の重複について

『琉歌集 春の部』は部立や歌の配列などから『古今琉歌集』と非常に近い関係にある歌集であると思われる。収録歌数は1,088首であり、『古今琉歌集』より612首少ない。この612首のうち589首は『古今琉歌集』で節名が示されている歌と「仲風」の部の歌である。『古今琉歌集』で節名が付されている歌のうち、329番と330番の2首は『琉歌集 春の部』にも採られている。一丁表の綴じ代部分に「節組より追入」と記されていること、『古今琉歌集』で節名が付されている歌は『琉歌集 春の部』では2首を除いて採られていないことから、この『琉歌集 春の部』を元にして節組琉歌集から琉歌を追加し、『古今琉歌集』が編纂されたと推測される。

『古今琉歌集』で節名が付されていないものの『琉歌集 春の部』に採られていない歌は、『古今琉歌集』の2番、12番、13番、15番、21番、27番、30番、234番、309番、363番、437番、476番、521番、1104番、1185番、1209番、1214番、1225番、1358番、1508番、1631番、1667番、1668番の23首である。このうち、真境名安興らが編纂した『琉歌大観』（台湾大学図書館蔵）の「第十三輯 短歌 読人不知」の「以下古今琉歌集に拠る」として収録された部分を見ると、27番は「こてい節」、30番は「白瀬走川節」、476番は「謝敷節」と節名が記されている。また、521番は349番と、1508番は1492番との重複歌である。

②琉歌の表記の相違

両歌集で重複する歌を見ると、一方でひらがな表記になっている部分がある一方では漢字表記になっているなど、歌意に関わらない部分での表記の違いが多いが、それ以外にも次にあげる歌のように、歌の解釈に関わる異同がいくつかみられる。

あやかやいみほしやことふきや八十八になられてもなまのさかん（春の部・711番）

あやかやいみほしやことふきや八十八になられてもなまの佐嘉舞（古今・1105番）

「さかん」は勢いのよいさま、元気なさまの意である。「あやかってみたいものだ、寿は八十八になられても今のように盛んであるのを。」の意である。「さかん」を『古今琉歌集』は「佐嘉舞」と漢字で表記している。これは「さかむ」の仮名であるが、漢字で記したために『琉歌全集』（1598番）になると「左嘉舞」となり、語釈で「あて字であろう、酒の勢で扇舞でもしたことであろう。」と説明されるようになる。

次の例では、四句目「きじて」が『古今琉歌集』では「きゝて」となっている。

肝迷てさらめ頼まらぬ花は与所の詠めゆす朝夕きじて（春の部・635番）

肝まよてさらめたのまらぬ花は与所のなかめゆす朝夕きゝて（古今・998番）

「心が迷ったのであろうよ、頼みにならない花を他人が眺めることを朝夕禁止するのは」の意であるが、「きゝて」と表記されることで「聞いていて」の意に解釈されるようになる。『琉歌全集』（1918番）は「聞きゆて」と表記し、「自分の物にすることはできない花であるが、よその人が眺めていると聞くと、心が迷ってしまつて、おだやかでない気持ちになる」と解釈している。

次の例では、四句目「こきゆん」が『古今

琉歌集』で「こしゆん」と表記されている。

留てとめらゝぬ老のしからみも明日や春の浦こしゆんとめは（春の部・194番）

とめてとめらゝぬ老のしからみも明日やはるの浦こしゆんとめは（古今・239番）

「漕ぐ」の意の「クジュン」を『古今琉歌集』は「こしゆん」と表記したのである。歌は「留めても留められない老いのしがらみも、明日は春の浦を漕ぐと思うと。」の意である。一年の終わりが近づき明日は春となる日の感慨を詠んでいるものである。明日はもう春という季節の中にいることを「春の浦を漕ぐ」と表現している。しかし『古今琉歌集』が「こしゆん」と表記したことで「クジュン」（越す）と理解され、『琉歌全集』（2872番）では「越しゆん」と表記されている。冬の部に採られた歌であることを考えると「春の浦を越す」ではなく「春の浦を漕ぐ」が適当であろう。

(4)今後の課題

『古今琉歌集』は読んで楽しむ歌集として、また歌作の際の手本として多くの人に親しまれてきた。『古今琉歌集』はその後の琉歌集にも大きな影響を与えている。この『古今琉歌集』がどのように編纂され、そして受け継がれていったのか。部立本琉歌集の関係を明らかにし、収録された琉歌を詳細に比較することで、一部ではあるが、明らかにすることが出来たのではないだろうか。

ほとんどの琉歌集が本の成立に関する記述を欠いている。その為歌集間の関係について、これまでほとんど明らかにされてこなかった。今回の研究では部立本琉歌集の中から『古今琉歌集』を中心に見ていったが、この他にも教訓歌集や節組琉歌集などが残されている。琉歌集に関する情報を整理し、収録された琉歌の比較検討を行うことで、これまでの解釈を改める必要も出てくるだろう。今後の課題である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① 前城淳子、伊波普猷文庫蔵『琉歌集春の部』解説と翻刻、日本東洋文化論集、査読無し、第17号、2011年、1-72頁
<http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/20354>
- ② 前城淳子、琉歌に歌われた「豊作」、沖縄文化、査読無し、第108号、2010年、78-92頁

③ 前城淳子、琉歌について、国文学解釈と鑑賞、査読無し、第75巻1号、2010年、128-131頁

④ 前城淳子、琉歌〈旅歌〉の諸相、日本東洋文化論集、査読無し、第15号、2009年、41-111頁

<http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/9968>

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前城 淳子 (MAESHIRO JUNKO)

琉球大学・法文学部・准教授

研究者番号：90336355

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし